

病虫害発生予報 第3号(6月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2300

＜予報の概要＞

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	いもち病	並	野菜全般	ミカンキイロアザミウマ	やや少
	紋枯病	並		シロイチモジヨトウ	やや多
水稲	ヒメトビウンカ	並	カンキツ	黒点病	並
	縞葉枯病	やや少		かいよう病	並
	ツマグロヨコバイ	並		ミカンハダニ	やや少
	セジロウンカ	並		ヤノネカイガラムシ	並
	トビイロウンカ	並		チャノキイロアザミウマ	やや少
	ニカメイガ	並		アブラムシ類	並
	イネミズゾウムシ	並			
ウリ科野菜	モザイク病	並	カキ	うどんこ病	並
	べと病	並		円星落葉病	やや少
	褐斑病	並		角斑落葉病	やや少
	うどんこ病	並		カキクダアザミウマ	やや少
	疫病	並		チャノキイロアザミウマ	並
野菜全般	つる枯病	並	モモ	せん孔細菌病	並
	炭疽病	並		カイガラムシ類	やや少
野菜全般	アブラムシ類	やや多	果樹全般	カメムシ類	少
	ハダニ類	並			
	ミナミキイロアザミウマ	並			

気象予報

1か月予報（予報期間 5月27日～6月26日 大阪管区气象台）

＜予想される向こう1か月の天候＞

期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。期間の後半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）＞

【気温】近畿地方	10	30	60
【降水量】近畿地方	30	40	30
【日照時間】近畿地方	30	40	30

凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

	月平均気温(平年値) (℃)	月降水量(平年値) (mm)
6月	和歌山 23.0	和歌山 189
	潮岬 22.0	潮岬 352

I. 水 稲

1. いもち病（苗いもち、葉いもち）

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 6月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 低温、日照不足、長雨が続く条件で発生しやすい。

② 県南部の早植え地域の常発地では気象条件に注意し、発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。

③ 県北部、県中部の普通期栽培地域では、キヌヒカリ、コシヒカリなどの罹病性品種を作付けする場合には育苗箱施薬剤を施用する。

④ 田植え後の余り苗を水田に放置しない。

2. 紋枯病

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 6月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 気温が高まると病勢が進展するので、発生に注意する。

② 県北部、県中部の普通期栽培地域の常発地では、田植え時に育苗箱施薬剤を施用する。

3. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

（1）予報内容 ヒメトビウンカ 発生量 並

縞葉枯病 発生量 やや少

（2）予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭（平年：いずれの地域も0.1頭）であった。

② 県北部におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率は、和歌山市3地点の平均4.1%（平年14.4%）、かつらぎ町7.9%（平年13.9%）であった。

③ 県北部の本田における前年の縞葉枯病の発生面積率は4%（平年12%）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。

② 田植え時はヒメトビウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

③ 第2世代成虫は6月下旬頃に水田に飛来し、第3世代幼虫の発生最盛期は7月上旬頃と考えられることから、前年に縞葉枯病の発生が認められた地域では、この時期の幼虫を対象に追加防除を行う。

4. ツマグロヨコバイ

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭（平年：紀の川市0頭、上富田町0.2頭、那智勝浦町0.1頭）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

① 田植え時にツマグロヨコバイに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

5. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 やや早い 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県内の予察灯（紀の川市、上富田町、那智勝浦町に設置）への初飛来は5月14日（那智勝浦町、1頭）で、平年（5月24日）よりやや早い。

② 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平年0.2頭）、上富田町0頭（平年0.6頭）、那智勝浦町1頭（平年0.1頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時にセジロウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

6. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町のいずれの地域も0頭（平年：いずれの地域も0頭、初飛来の平年：6月29日）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時にトビイロウンカに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

7. ニカメイガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市、上富田町および那智勝浦町でいずれも0頭（平年：紀の川市0.1頭、上富田町0頭、那智勝浦町0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 前年に発生が認められた地域では、田植え時にニカメイガに効果がある育苗箱施薬剤を施用する。

8. イネミズゾウムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による5月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平年0頭）、上富田町25頭（平年23.2頭）、那智勝浦町28頭（平年12.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イネミズゾウムシに効果がある育苗箱施薬剤を施用していないほ場で、田植え3～7日後に成虫による食害株率が30%あるいは成虫が1株あたり0.5頭を越える場合は、直ちに薬剤防除を実施する。

II. 野 菜

<ウリ科野菜>

1. モザイク病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の施設栽培キュウリおよび露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率はいずれも0%（キュウリ：過去9年の平均4%、スイカ：過去6年の平均0%）であった。

② 県中部の施設栽培キュウリおよびトンネル栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率はいずれも0%（過去9年の平均：いずれも0%）であった。

- ③ アブラムシ類の発生は平年よりやや多いと予想される。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① アブラムシ類の防除を徹底する。

2. ペト病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は65%（平年40%）であった。
 - ② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は50%（過去9年の平均58%）であった。
 - ③ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
 - ② 薬剤防除は予防散布を重点に、葉裏に薬液が十分かかるように行う。

3. 褐斑病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（過去7年の平均5%）であった。
 - ② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は79%（前年91%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 施設栽培では換気を十分に行い、湿度低下を図る。
 - ② 罹病葉や収穫後の残さは速やかに処分する。
 - ③ 病原菌の胞子が資材に付着して伝染するので、支柱等再利用する資材は栽培終了後に消毒する。ネットやマルチ等は更新する。

4. うどんこ病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は12%（平年29%）であった。
 - ② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月中旬の発生ほ場率は86%（過去9年の平均78%）であった。
 - ③ 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
 - ④ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 施設栽培やトンネル栽培では風通しを良くし、薬剤防除は葉裏にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。

5. 疫病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平年0%）であった。
 - ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（過去9年の平均0%）であった。

- ③ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤防除は予防散布を重点に、6月上旬頃から定期的に行う。
 - ② ほ場の排水を良くし、マルチ、敷わらを行う。

6. つる枯病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。
 - ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（過去9年の平均0%）であった。
 - ③ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 梅雨期の降雨にともない株元から発病するので、薬剤散布にあたっては株元にも薬液が十分かかるように行う。

7. 炭疽病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の露地栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。
 - ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（過去9年の平均0%）であった。
 - ③ 6月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 6月以降の露地条件で降雨が続くと被害が拡大しやすい。病斑上の胞子が雨滴などで飛散するため、薬剤の予防散布に努める。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培ナスにおける5月中旬の生息葉率は、モモアカアブラムシ0%（平成0.8%）、ワタアブラムシ0%（平成0.1%）であった。
 - ② 県中部の施設およびトンネル栽培スイカにおける5月中下旬のワタアブラムシの発生ほ場率は86%（平成51%）、生息葉率は3.2%（平成6.5%）であった。
 - ③ 黄色水盤（紀の川市）の5月1～20日の飛来数は887頭（平成82.1頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 同一系統の薬剤は連用しない。
 - ② 薬剤散布にあたっては葉裏に薬液が十分かかるように行う。

2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部の施設栽培ナスにおける5月中旬のカンザワハダニの発生ほ場率は9%（平成9%）、生息葉率は0.4%（平成1.3%）、ナミハダニの発生ほ

場率は0%（平年0%）であった。

- ② 県中部の施設およびトンネル栽培スイカにおける5月中下旬のカンザワハダニの発生ほ場率は79%（平年60%）、生息葉率は6.3%（平年14.4%）、ナミハダニの発生ほ場率は7%（平年33%）、生息葉率は0.1%（平年6.9%）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

- ① 同一系統の薬剤は連用しない。
- ② 薬剤散布にあたっては葉裏に薬液が十分かかるように行う。

3. ミナミキイロアザミウマ

（1）予報内容 発生量 並

（2）予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培ナスにおける5月中旬の発生ほ場率は45%（平年23%）、生息葉率は6.2%（平年6.5%）であった。
- ② 県中部の施設栽培キュウリにおける5月下旬の発生ほ場率は56%（平年42%）、生息葉率は9.8%（平年3.3%）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

- ① 発生の多い場合は4～5日間隔で2回以上、薬剤を散布する。
- ② 施設栽培では、栽培終了後に7～10日間以上施設を密閉してアザミウマを死滅させ、後作の発生源にならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

（1）予報内容 発生量 やや少

（2）予報の根拠

- ① 県北部の施設栽培ナスにおける5月中旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率6%、生息葉率0.8%）であった。
- ② 県中部のトンネル栽培スイカにおける5月下旬の発生ほ場率は0%（平年：発生ほ場率9%、生息葉率1.1%）であった。

（3）防除上考慮すべき諸点

- ① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

5. シロイチモジヨトウ

（1）予報内容 発生量 やや多

（2）予報の根拠

- ① 県中部の施設およびトンネル栽培スイカにおける5月中下旬の発生圃場率は7%（平年3%）、生息葉率は0.1%（平年0.2%）であった。
- ② フェロモントラップによる5月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平年1.9頭）、御坊市121頭（平年32.6頭）、印南町10頭（平年29.9頭）であった。
- ③ 6月の気象予報による。

（3）防除上考慮すべき諸点

- ① 若齢幼虫を対象に初期防除に努める。
- ② 幼虫は作物の生長点付近の未展開葉の芯部に潜入するので、薬剤による防除効果が上がりにくい。初期は局部的に発生するので、管理作業時に見つけしだい捕殺する。
- ③ 施設栽培では、栽培終了後に20日程度施設を密閉して死滅させ、後作の発生源にならないようにする。

Ⅲ．果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 5月下旬までに薬剤散布を実施していない園では早急（6月上旬）に防除を行う。

② マンゼブ剤またはマンネブ剤を用いる場合、1回目散布後の累積降水量が250mm程度となった時点で次の散布を行う。

③ 伝染源となる枯枝や剪定枝の処理を徹底する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における春葉の越冬病斑の発病葉率は2.7%（平年12.7%）であった。

② 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）において、春葉での初発は5月19日（平年5月23日）であった。

③ 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 銅水和剤の予防散布を行う。散布時には薬害軽減の策を講じる。

② 罹病枝葉の剪除と防風垣の整備に努める。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における5月中旬の100葉あたり雌成虫数は0頭（平年2.0頭）であった。

② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性対策としてマシン油乳剤の散布を励行する。マシン油乳剤の散布は発生初期に行うと高い防除効果が得られる。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生時期

第1世代1齢幼虫最盛期 6月1～5日 （平年6月1～5日）

同 2齢幼虫最盛期 6月16～25日 （平年6月16～25日）

同 雌成虫初発日 6月21～25日 （平年6月21～25日）

発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）での第1世代1齢幼虫の初発は5月17日（平年：5月17日）であった。

② 前年10月における発生園率は8%（平年8%）、発生果率は0.4%（平年0.4%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 多発園では、2齢幼虫最盛期にマシン油乳剤や有機リン系の殺虫剤を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、由良町）における5月中旬の黄色粘着トラップによる誘殺数は24頭（平年59頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 地域での発生消長調査の結果を参考に、適期防除に努める。

6. アブラムシ類

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）では5月中旬の発生葉率は2%であり、各地域においても発生量は平年並であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 各園地の発生状況を把握し、適期防除に努める。

<カ キ>

1. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における5月中旬の「富有」での発生園率は12%（平年7%）、発病葉率は0.2%（平年0.2%）であった。

② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 伝染源となる病斑上の病原菌は、6月以降活発に形成され伝染を繰り返す。病原菌は葉裏の気孔から侵入するため、薬剤防除にあたっては葉裏にも丁寧に薬液を散布する。

2. 円星落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部における前年10月の「富有」での発生園率は35%（平年39%）、発病葉率は0.6%（平年5.1%）であった。

② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 病原菌の飛散は5月上中旬から始まり、5月下旬～7月中旬の降雨後に多い。二次感染はしない。

② 5月から8月までマンゼブ水和剤、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

3. 角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部における前年10月の「富有」での発生園率は77%（平年77%）、発病葉率は8.2%（平年17.4%）であった。

② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 病原菌による感染は5月上中旬から始まり、7月中下旬まで続く。二次感染を繰り返す。

② 薬剤防除は、円星落葉病に準ずる。

4. カキクダアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における4月1日～5月15日の黄色粘着トラップによる誘殺数は2頭（平成9.3頭）であった。

② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防除適期は新成虫飛来期の6月上中旬である。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における4月1日～5月15日の黄色粘着トラップによる誘殺数は5頭（平成6.5頭）であった。

② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防除適期は新成虫飛来期の6月中下旬である。

6. フジコナカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部における5月中旬の「富有」での寄生花蕾率は0.2%（平成1.4%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 樹体生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期である6月上中旬に薬剤を散布する。多発園では薬液を丁寧に散布する。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における5月中旬の発生園率は50%（平成40%）、発病葉率は0.8%（平成1.7%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 防風ネット、防風樹の設置などの防風対策を励行する。

2. カイガラムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部における5月中旬のウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ雌成虫寄生枝の発生園率は10%（平成19%）、寄生枝率は0.8%（平成2.2%）であった。

② 6月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期の少し前に薬液を散布する。

- ② 近年の第2世代ふ化幼虫発生盛期は、ウメシロカイガラムシが7月1～5日頃、クワシロカイガラムシが7月11～15日頃である。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報の根拠

- ① 県内47地点のチャバネアオカメムシ越冬成虫の捕獲頭数は、落葉50リットル当たり0頭（前年0.3頭、平年0.5頭）、捕獲地点率は0%（前年19.1%、平年20.0%）であった。
- ② 紀の川市粉河の予察灯での5月中旬の誘殺数は、チャバネアオカメムシが3頭（前年8頭、平年26頭）、ツヤアオカメムシが19頭（前年23頭、平年32頭）であった。
- ③ 有田川町奥の予察灯での5月中旬の誘殺数は、チャバネアオカメムシが0頭（前年1頭、過去3年の平均55頭）、ツヤアオカメムシが11頭（前年3頭、過去3年の平均140頭）であった。
- ④ みなべ町東本庄の予察灯での5月中旬の誘殺数は、チャバネアオカメムシが42頭（前年271頭、過去5年の平均114頭）、ツヤアオカメムシが126頭（前年248頭、過去5年の平均285頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生および被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ② ウメの被害には品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。
- ③ 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所コーナーの果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所コーナー>

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所(TEL 0736-64-2300)までお願いします。